

全盲女性の育児体験のふり返り

——産後4ヵ月に行った一事例のインタビュー——

高橋 聡子

はじめに

母子の間には五感を活用した母子相互作用が生まれている。今回、全盲の母親と関わりを持つ機会があり、母親が視覚以外の感覚で育児していく姿に感動し、同時に児のどのようなサインを感じているのか、それは健常者が感じているサインと同じなのかという疑問をもった。もし違った視点のサインを感じているとすれば、それは育児経験の乏しい健常者の母親達にとっても、私達医療者にも大変貴重なヒントとなるのではないかと考え今回のインタビューを実施した。

事例報告

Aさん, 30歳, 初産。職業はマッサージ師。

2歳で右網膜芽細胞腫にて両眼を手術, その後全盲となる。夫も全盲であり, 職業はマッサージ師。

今回は里帰り出産で, 当初半年で夫と二人暮らしの自宅へ戻る予定だったが, インタビュー時には3年ほど実家で過ごすこととしていた。主な育児協力者は実母。家族構成は7人家族。実父母, 妹夫婦とその子2名と同居している。

本人へ電話にて研究の趣旨を説明, 承諾をいただいた上で産後4ヵ月に家庭訪問にて1時間程度の半構成的インタビューを実施した。インタビュー内容は許可を得て録音, 逐語録を作成し, 内容を整理した。また, インタビュー当日書面にした研究の趣旨を音読し, Aさん本人からの再度の承諾, 及び実母から承諾を得, 実母より代筆にて同意書をいただいた。

インタビュー結果

1) 育児全体の振り返り

生後間もない児を「最初はやわらかくて, ぐにゃぐにゃ」「凄く抱っこしにくい」と振り返り, 特に「頭, 首」の支えが難しかったと語った。更に「ミルクあげるのでもオムツ替えでもあやすでもどれをとってもやっぱり最初のうちは当然ですけど初めてじゃないですか」と初めて触れる新生児に戸惑っていた様子を語った。その後「退院して2週間ぐらいだと大量ウンチはなかなか対応できなかった」が, 一ヵ月健診の頃には今よりは上手でないが「出来てはいたと思う」と振り返り, 現在では「やるしかない」「焦らないようにしてますね」「それを自然に出来るようになっていましたね」と育児を自然に出来るようになっていった様子を語った。

2) 触覚から得る情報に関して

生後間もない児を世話したときの事を振り返り, 「私らは感覚で覚えていくしかないですよ」「抱っこしたときの手の感覚とか, どのくらいの角度だったかなとか」と語り, 更に「周りで見てる人がちょっと頭が下がってるとか教えてくれる。こんなもん? って聞いたらまあいいんじゃないかなとか言われて」や「あとは子ども自身。抱かれて居心地が良い悪いっていうのがあるのかなって, そういうときの動きで覚えていくしかないというのはありますね」と語り, 周りからの具体的な意見を参考にして, 主に触覚から得る情報を中心に児の世話をしていた様子を語った。

3) 聴覚から得る情報に関して

出産後間もない時期, 聴覚からの得る情報で判断することの難しさを「最初はどうしても声でサ

インを判断するのって少し難しいところがあった」と振り返っていた。しかしインタビューを行った4ヵ月の時点では、児の機嫌を判断する際に「最近であれば声の出し方とか」や表情に関して「触ることもありますけど、でも大概、それは聞いている。どっか声とか」と語り、児の成長発達と共に、聴覚から得られる情報量が増加している様子を語った。更に今後に関しては「鈴とかつけどうかなとか今んとこは思ってるんですけど。」と更に聴覚から得る情報の増加とそれを元に判断しているように話す様子を語った。

4) 嗅覚から得る情報に関して

オムツを替えるタイミングを図る際に「紙おむつだとゼリー状になるところがあって、そこを触るとおしっこをしているかしてないか分かる」と触覚から得る情報と合わせて「ウンチの場合はあとにおい」「おしっこにもにおいがあるんですね」と語り、触覚と嗅覚から得る情報を合わせて行動していた。

家族のサポートに関して

「助けがあってくれるっていうのは一番大きいところだと思います。一人じゃないので」と語り、「保健師さんの話なんか聞いてると誰も助けがなくて、一人でやって」「私以上の苦勞をしている人もいないんじゃないですか？普通に見えていても」と語り、自分の育児にとってサポートしてくれる人のいる事の重要性を語った。

考 察

今回インタビューをするにあたり仮説として、視覚障害があることにより、健常者とは違う視点で児のサインを判断し、確認しているのではないかと考えていた。しかし、逐語録を振り返ると、Aさんが今までの育児を振り返りながら語ったことと、日々のケアで出会う健常者の初産婦が育児に関して語ることとは特徴的な違いは見出せなかった。このことより、全盲であっても、健常であっても援助者として関わる私達の姿勢は共通のものがあると考えられる。

児が生後間もない頃、聴覚から得る情報だけで

は、児の状況が読み取りにくいと感じる。このような時期には触覚から得る情報がAさんの育児の中で大きな役割を占めていた。

Aさん自身が周りにいる人に自分の児の世話の仕方の良し悪しを尋ね、「感覚で覚えていくしかない」と語るように、私達医療者は産褥早期には触覚から得ようとする情報の補助として、具体的な言葉で手技を修正するように伝えていく関わりが重要であると考えられる。

このことは育児に不慣れである産褥早期の母親たちにも同様であり、児の世話をしているその様子を視覚的に伝え、触覚を通して児を感じてもらおうよう意識することは有用であると考えられる。

また、Aさん自身も家族のサポートの重要性を語るように、家族の協力は無くてはならない。同時にそのサポーターとして我々医療者は本人家族と足並みをそろえることが必要となる。

今回は1事例であり一般化は出来ないが、Aさんが産後一ヵ月頃を、児の世話が「出来てはいたと思う」と振り返ったことは、今後全盲の方を援助させていただく上で一つのヒントとなると考える。

短い入院期間の間に児の世話が出来るようになってはという気持ちは、本人、家族、医療者それぞれに焦りをうみ、結果として足並みの乱れを招き、関係性の悪化をきたすこととなる。人体の感覚受容器の70%が眼にあると考えられており¹⁾、この情報量の差から産褥早期には手技の確立に時間を要すると考えられるものの、Aさんは確実に育児に慣れていった事を語ってくれた。このことより、Aさんのような方には本人、家族、医療者が入院期間を越え退院後を含めた共通目標を確認しあい、お互いの役割や、関わり方を模索し、共にステップアップしていくことが必要となる。特に私達医療者には、本人家族が自分達のやり方で育児を行っていく様子を、じっくりと待ち見守ること、また入院期間の枠を越えた育児支援のあり方を広く考えられる看護力を養っていくことが必要と考えた。これらのことが本人家族の必要とする支援の明確化につながり、より良い三者の協力関係が築けるのではないかと考えた。

最後に

今回のインタビューを終え A さんとの関わりに戸惑いを覚えていたのは私のほうであったことに気づかされた。

今回の研究を通して得られたことを、今後同様の疾患を持つ方の援助につなげていけるように大切にしていきたいと思う。

まとめ

- 1) 視覚障害があっても育児の振り返りでは特徴的な項目は無かった。
- 2) 産褥早期の育児には＜触覚から得る情報＞が大きな役割を持っている。
- 3) 全盲の方には、本人・家族・医療者が入院期間を越えた共通目標を確認しあうことが必要である。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、快く研究に協力し

てくださった A さん、ご家族の皆様、またご助言いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) エイレン N. マリーブ著、林正健二 他 訳：人体の構造と機能、医学書院、東京、p 214, 1999

参考文献

- 1) 塩野悦子：双胎の一児を亡くした母親の経験—流産後 2 年経過した 1 事例から—。宮城大学看護学部紀要 9, 2006
- 2) 松井弘美 他：乳児を持つ母親の育児行動をめぐるおむつ交換の意味～エスノグフィーによる分析を試みて～。富山大学看護学会誌 6, 2007
- 3) 森 愛子：視覚障害をもつ母親の立場から。助産婦 53, 1998
- 4) 松岡 恵 編著：やさしく学ぶ看護学シリーズ 6 母性看護、日総研出版、名古屋、1999
- 5) 林 圭子 他：視力障害を持った高齢初産婦への援助—育児指導を通して—。第 19 回日本看護学会集録（母性看護）、pp 173-175, 1988